

学位請求論文（論文博士）審査報告

学位請求論文：古墳から見た甲斐の地域社会

学位請求者：小林 健二

審査委員

主査 専修大学文学部 教授 土生田 純之 ㊞

副査 専修大学文学部 教授 高久 健二 ㊞

副査 帝京大学文化財研究所 研究員 宮澤 公雄 ㊞

審査委員会は、提出された本論文を問題関心、研究の先進性、論文構成の説得性、研究の到達点、考古資料収集の広さと実証性、今後の展望などを中心に審査した。また、口述試験において、直接、請求者本人より上記の審査観点について質問し、判断材料を得た。

1. 論文の骨子と評価

本論文は、3世紀から7世紀の古墳を資料として甲斐（甲府盆地）の地域社会を明らかにしようとする研究である。

序章では、対象地域である甲斐地域の地理的・歴史的環境がまとめられており、本論文の目的が的確に述べられている。

第1章では本論文の前提として、弥生時代終末期から古墳時代前期の古式土師器の編年をおこなっている。まず、S字状口縁台付甕について検討をおこない、東日本のなかでは早い段階で当該地に波及し、重要な画期をなすと指摘した。東海系土器についても検討し、その編年を通して古式土師器の成立過程を明らかにしている。北陸系土器、畿内系土器についても取り上げ、甲斐の古墳時代前期土器における位置づけを検討している。さらに、古墳時代中期・後期・終末期の編年設定もおこなっている。本章では甲斐地域の古墳時代前期のS字甕の分類と編年をおこない、東海系土器の波及と定着過程を整理したうえで、古式土師器の編年をおこない、さらに北陸系土器や畿内系土器の様相についてまとめている。編年によって時間軸を設定するだけでなく、土器の様相から古墳出現期における地域間関係を明らかにしている点が注目される。

第2章では、まず甲府盆地南部の中道古墳群に位置する甲斐天神山古墳が古墳時代前期に遡上することを明らかにし、甲斐地域における最古の前方後円墳であると指摘している。また、大丸山古墳の特異な主体部構造を検討し、従来の認識と異なる部分を指摘した。古墳時代前期の東日本における最大級の前方後円墳である甲斐銚子塚古墳について、出土品を中心にその意義を再検討している。その結果、出現の背景と交通路を介した東日本の中での甲斐地域の先進性および歴史的意義を見出している。本章は3世紀末～4世紀初頭の甲斐天神山古墳、4世紀第1四半期の大丸山古墳、4世紀第2四半期の甲斐銚子塚古墳などの甲斐地域を代表する古墳時代前期古墳について具体的に検討した部分である。大丸山古墳については、従来特異な構造ととらえられてきた「二重構造」ではなく、通常の「組合式石棺を納めた竪穴式石槨」であることを指摘している点が注目される。甲斐銚子塚古墳については、腕輪形石製品、壺形埴輪、円筒埴輪、木製品の分析をおこなっており、とくに円板形木製品や幡形木製品を「甲斐銚子塚型祭祀具」として、地域性をもって被葬者の威儀が強く反映されたものとしてとらえる視点は東国の前期古墳を理解するうえで極めて重要である。

第3章では、甲斐地域における古墳時代中期の古墳について検討している。古墳時代中期の甲斐地域

は、古墳時代前期と異なり中・小規模の墳墓が多くなる。このような変化は、弥生時代以来の伝統的な墓制である周溝墓の存在が起因すると指摘している。大型方墳である竜塚古墳は、伝統的方形墳墓の復権として採用された可能性を検討している。そこには甲斐地域における方形墳墓に対する根強い「地位的嗜好性」があったとする。5世紀代の甲斐地域では方形周溝墓から飛躍した方墳が築造されていることから、前方後円墳を頂点とした重層的な社会構造とは異なることを明らかにした点は古墳時代中期の東国社会を理解するうえで注目される。

第4章では、古墳時代後期の甲斐地域における横穴式石室の導入について考察している。まず、積石塚古墳をはじめとした小規模古墳に無袖石室が導入され、その後、有袖石室が大型古墳に採用されることを明らかにするとともに、無袖石室の構造・系譜・階層性について検討している。さらに、甲斐地域にみられる積石塚について、渡来人や馬との関連性に着目して比較検討をおこない、他地域に比べて後出的であることを指摘している。本章では、甲斐地域の無袖横穴式石室を整理し、6世紀前半に積石塚の出現とともに埋葬主体部として導入されたことを明らかにしており、その系譜について、駿河地域だけではなく、信濃、上野、三河との関係に着目している点が評価される。

終章では、甲斐地域における終末期古墳の様相について検討している。また甲斐地域における寺院の造営にも着目し、古墳時代の終焉の様相について検討している。甲斐地域における終末期古墳の変遷を明らかにしたうえで、いち早く前方後円墳の造営が終了し、7世紀代に大型方墳が存在しないという東国では特異な甲斐地域の律令社会への胎動を描き出している。

本論文は甲斐地域（甲府盆地）を一つのまとまりとしてとらえて、古墳時代前期から終末期の古墳資料をもとに、当該地域の社会の特質を明らかにしたものである。長年にわたって山梨県を中心におこなってきた調査研究にもとづいた成果であり、内容に説得力がある。甲斐地域を対象とした地域研究の一つの到達点を示すものとして評価できる。

2. 課題と今後の展望

本論文は以上のような成果が認められながらも、いくつかの課題も残された。

まず、S字甕の流入経路については、相模からのルートと信濃からのルートを想定しているが、信濃ルートの明確な根拠を示すべきであった。また、S字甕の普及と当時の社会の緊張関係がどのように結びつくのかについてもさらに説明が必要であった。前期古墳については、築造年代を独自の土器編年によって遡らせているが、副葬品の年代観との齟齬がみられる部分もあり、説明が必要である。また、甲斐銚子塚古墳を畿内の王墓、岡銚子塚古墳を在地首長墓ととらえているが、両者の関係についても再検討が必要である。また、古墳時代中期の方形墳墓に対する「地位的嗜好性」についてもさらなる検討が必要である。

なお、小林氏からは以下のような今後の展望が提示された。

- ①古墳時代における集落遺跡に関する分析・検討
- ②気候変動や洪水などの自然災害との関係の検討
- ③玉作遺跡や鍛冶工房など生産遺跡の検討

これらの課題について検討をつづけ、今後も甲斐地域の実像を明らかにしていきたいと述べている。

3. 口述試験

口述試験は、土生田、高久、宮澤の三委員によって実施された。主査の土生田は総合的観点から、副査の高久は朝鮮半島の考古学的観点から、同じく副査の宮澤は甲斐地域の考古学的観点から質疑応答をおこなった。各委員の総括的質問と個別的質問に対して、本論文提出者は明確に回答し、十分な対応がなされたと判断した。なお傍聴者は本学の大学院生を中心に6名であった。

以上、学位請求論文ならびに口頭試問などを総合的に判断して、審査者三名は一致して、小林健二氏に博士（歴史学）の学位を授与することを認める結論に達した。

以上